

大学と地域の連携

～若者社会活動支援NPO法人DNAの活動を中心に～

大宮 登

(高崎経済大学教授)

一 継続性を求められる「大学と地域の連携」

大学と地域の連携は、いよいよ自身の充実度を競い合う時期にさしかかっている。私が所属する高崎経済大学では、平成八年度にわが国で最初の地域政策学部を立ち上げ、その学部の性格上、教職員と学生が一体となって、地域貢献事業に積極的に取り組んできた。まさに、「大学と地域の連携」は本学部にとって、そして私にとって、研究教育の中心テーマであった。私はこの学部設立後の一二年間、地域政策学部の教授として理論研究と実践を続けてきたのだが、最近、大学と地域の連携に関する講演、論文、視察

などの依頼が続いている。それは、なぜなのか。大学はこれまで、どちらかと言えばアカデミズムの世界に耽溺し、象牙の塔として閉鎖的な空間を作り、高邁な理論研究に没頭してきた傾向を持っていた。こうした大学が、今日、より実践的で、より地域密着型の教育・研究を求められ、大学と地域の連携問題が急浮上してきたからにはかならない。

地域社会と大学との関係は、今、大きな転換期を迎えているのである。大学は一八歳人口の減少の中で、全人時代に突入し、大学や短期大学の定員割れが常態化している。国公立大学の独立行政法人化が進められ、国公私の大が同じ土俵で競う環境が生まれ、自由競争の火ぶたが切って

落とされた。どの大学も、生き残るために組織改革や入試制度改革、カリキュラム改革などに取り組み、地域の中で存在感を示すことに躍起になっている。

私が所属する高崎経済大学もこのような状況を踏まえて、自治体の政策形成へ積極的に参画している。例えば、高崎市との総合計画や行動計画、あるいは、重要な案件を抱える各種の審議会には本学教員が座長や委員となって多数参画している。また、各種の調査、分析、政策提言活動にも多くのメンバーが関わっている。平成一八年度の実績では、約七〇件、延べにして約一〇〇人の教員が連携に関わっている。平成一九年度はさらに、地域政策研究科の地域連携プログラムが文部科学省の大学院教育改革プログラムに選ばれたこともあり、高崎市との連携が強化されている。高崎市にとって、本学は貴重な存在となっている。

最近、こうした地域連携が新たな展開を見せている。それは、組織的で継続的、そして総合的に地域貢献を行う動きである。単年度の単発的な地域連携ではなく継続的に、しかも大学教員が単独ではなく協働のチームとして関わる持続可能な地域連携の始まりと言ってもよい。大学と地域の連携を効果的なものとするためには、一人の研究者で解決することは難しい。専門を異にする複数の教員がプロジェ

クトを組んで対応しないと課題解決には至らない。理想を言えば、大学は地域貢献センターなどの拠点のもと、研究者、事務局、大学院生、学生が一丸となって、地域特性を調査し、課題を発見し、課題解決に向けた提言を地域住民や行政とともに言うという、組織的・継続的な参加と協働の仕組み作りが求められている。しかし、その実現はそれほどたやすいことではない。大学の教員は協働作業になれておらず、協働の内実がない連携事業となってしまうがちなのである。それゆえ、どこの大学においても、試行錯誤の毎日が続いていると言ってもよいだろう。

二 若者社会活動支援NPO法人DNAの活動

さて、大学と地域との連携について述べてきたが、本稿では、私の指導する大宮ゼミを母胎に活動する、NPO法人Design Net-works Association (以下、DNA)について紹介する。これも試行錯誤の連続である。全国的にも珍しい学生NPO法人のDNAは、平成一六年に法人格を取得して今年で四年目になる。この間、DNAは若者の社会活動の支援を目的に、文部科学省、経済産業省、厚生労働省、群馬県、高崎市、富岡市などと連携し、様々な社会

活動を展開してきた。私は、法人格取得以前からゼミの指導教員として、また、法人格取得後も代表顧問として関わってきたが、毎年主役が代わる学生NPO法人としてはなかなか頑張ってきたと思っている。

大宮ゼミ生は、DNAの事務局員として中心的な役割を担うとともに、大宮ゼミ以外の高崎経済大学生、前橋工科大学学生、新潟学園短大生、育英短大生などのDNAメンバーと連携しながら、組織全体の活動をマネジメントしつつ取り組んでいる。大宮ゼミは各学年一〜二人の人数で、三年と四年で二〇人強であり、それに、二年生は六月頃決定し、全部そろって、総勢約三五人のゼミとなる。最近では、三年生がDNA事務局を構成して活動の軸となり、活動を経験した四年生が代表理事や理事となって、後輩をサポートし、それに、二年生が夏休み前後から活動に徐々に加わってくるといいう体制をとっている。

DNAの活動の目的は、若者に社会に関わっていく力をつける場と機会を与え、多種多様な社会活動体験を通じて、キャリア設計、人生設計を考えるきっかけを作ることにある。現代の若者は個人化する社会の中で生活している。ここでは、地域社会や組織集団に関わっていく機会や、コミュニケーション力や人間関係形成能力を養成する場が少ない。そうした

状況を克服するために、若者たちに社会活動の場を与えることがDNAのミッションなのである。大宮ゼミ生はDNAの事務局員として、それぞれの役割をこなし、DNAメンバーと連携しながら、地域づくり活動に取り組んでいる。

今年度も、多くの活動を実践してきた。予算規模、連携の広がり、社会的影響力、活動効果、教育効果など、いろいろを考えてみても、全国的にもモデルとなる活動実績となっている。DNAの活動内容は、毎年変わるのだが、大きく四つの事業に分けられる。つまり、①「job-cafe事業」、②「CANWORK事業」、③「radi-com事業」、④「まちづくり事業」の四つである。簡単に概要を紹介しよう。

①「job-cafe事業」では、高崎駅前にある群馬県若者就職支援センター（ジョブカフェぐんま）の運営に携わっている。一年間ほとんど休みなくセンターの受付案内業務をこなしている。若者の就職支援のために、入りやすい空間を作り、相談しやすい雰囲気を作る。そのために、受付を学生が担当している。そのほかにも、ジョブカフェの広報誌「GOOD JOB」の発行、就職応援セミナーなどのセミナーやイベントの企画・実行などを行っている。それらの活動を通して、企業や職場の実態を知ることでもでき、社会人の基礎的マナー、キャリアデザイン力、企画力、交渉力、

コミュニケーション力などの様々な能力を伸ばしている。

②「CANWORK事業」は、群馬県労働政策課・厚生労働省と連携して実施している事業である。学生たちが群馬県内で働く社会人の方々に取材し、原稿をまとめ、その声をホームページで情報発信し、若者の就業意識の向上を図っている。学生たちは取材を通して、職場の実態を知り、仕事の面白さと大変さを知り、今後の生き方の参考にする。

また、それら取材の集大成として、毎年一月には群馬県庁で「働くこと」を考えるシンポジウムを開催し、社会人の方をパネリストに迎え、シンポジウム参加者が実際に社会人の方と触れ合える機会を作っている。

このシンポジウムを開催するために、五月から準備を始めシンポジウム実行委員会を一〇数回開催している。実行委員メンバーは群馬県内大学の学生合同委員会、毎年八〇人前後が実行委員に参加してくれる。テーマ設定、全体企画・運営、広報、組織作り、分科会進行、パネリストの参加交渉、レイアウト、進行台本、弁当手配など全てを学生たちが行っている。今年度も約三〇〇人が参加し、有意義な時間を過ごした。

学生たちは、これらの活動を通じて、多くの職業人たちと直接意見交換する機会を得て、人生観、職業観を改めて考え



学生企画；就職応援セミナー（ジョブカフェ）



GOOD JOB vol.5

る機会を得ている。

の学生が月一回ずつ分担し、毎週行っている。高崎経済大学の放送内容は、大宮ゼミ生が自主的に企画し、取材し、シナリオを考え、簡単なリハーサルの後、放送に当たって

③「radi-com事業」では、ラジオ高崎にて月二回、三分間の放送分の収録を行っている。コミュニケーションを豊かにし、コミュニケーションの元気作りに一役買

いたいとして平成一年から始められたこの事業も、早九年目となる。現在は、高崎経済大学が二回の、前橋工科大学と群馬県立女子大学



CANWORK 取材



働くことを考えるシンポジウム(群馬県庁)

と連携し、各地域でのお祭りやイベントの企画に関わっている。今年度は、富岡げんきフェスタや富岡シルクデー、高崎まつりや高崎観音山の万灯会など、様々なお祭りやイベントに参加した。また、ゼミの学生を中心に、榛名湖のイルミネーションのお手伝いや、観光マップ作りにも挑戦した。まちづくり事業の魅力は、何となくも地域の人々との触れ合いである。イベントや祭りで関わる現地の人々の方々から学ぶことは多く、また地域の人々のあたたかさを感じることで、地域の大切さを学んでいる。

いる。DNAの活動の紹介を中心に、DNAが主催するイベントを告知し、その活動の報告を行う。そのほかにも、自分たちで調査した「道の駅」特産品の紹介をしたり、高崎経済大学の学生たちの活動を市民に知らせたりしている。ラジオというメディアを通して何かを伝えることに初めは緊張していたが、公共の電波を通して、話せるだけの度胸を身に付け、コミュニケーション力や表現能力を高めることができていく。

④「まちづくり事業」では、高崎市や富岡市の青年会議所

三 地域の教育力・NPOの教育力ーDNAで成長する学生たち

これらのDNA活動を中心になって推進している大宮ゼミ生は忙しい。特に、三年生は事務局員として想像を絶する忙しさである。しかし、彼らは失敗や対立を繰り返しながら、多くのことを学び、大きく成長する。仲間と出会い、社会活動事業を通して、協力し、ぶつかり合い、考え、行動し、社会人としての基礎力を磨いていく。その成長過程



スタジオでのradi-com収録



高崎祭り参加

たりすることもありますが、一つの目標に向かってゼミ生みんなで活動を共にするという今の経験は、大宮ゼミだからこそ体験できることだと思ふ。大宮ゼミでの一年間は、何ものにも換えがたい、充実した一年間だった。」

は、今年度の大宮ゼミ四年生(小林誠代表理事)が自分の三年生のときの活動を振り返って、後輩たちに送った次の言葉でも明らかである。

「大宮ゼミは忙しいという話をよく耳にする。それは私たちゼミ生も同感であるが、その忙しさや大変さ以上のものを大宮ゼミの活動から学べると、私たちは一年間の活動を通して感じている。大勢の人の前でプレゼンやイベントの企画書の作成など、本当に多くのことを体験する。ときにはゼミ生同士で言い合いになったり、責任の重さに泣いてしまっ

り指導ができない私を配慮しているかのように、学生たちは多くの困難と思われる活動に、自ら積極的に立ち向かい、公益的な社会活動を行うことによる自己成長を遂げている。

学生たちは地域と連携し、地域社会の大人たちと交流する中で育てられ、戸惑いや失敗や挫折を経験する機会も多いが、失敗の中から先輩たちが獲得し、積み上げてきた知恵を活用し、大きな成果を得ている。大宮ゼミもDNAも、そして私も、試行錯誤の連続とはいえ、相互成長、相互信頼の基盤を創りつつあるのかもしれない。